

「鼠の嫁入」と兒童の心

小池 藤五郎

現代の人々が鼠に對して持つ感情を、昔の人々が鼠に對して抱懐してゐた處きは、かなり違つてゐた。今日の我々が鼠に就いて抱持する感情は、恐るべき病原菌の傳播媒介者としての恐怖であるが、昔の人々はそんな氣持を寸毫も持つてはゐなかつた。鼠は我々の祖先たちからは甚だしく厚遇されて來てゐた。そして我等の祖先は、人間生活の各方面を、福徳そのものであるに信じてゐる鼠によつて、一入滿ち足りた状態で表現する事を喜んでゐた。既に述べた赤本「鼠のよめ入」に描かれてある典型的の鼠の嫁入が、人々の口に喜び語られてゐたに同時に、この話から分岐して、人生の多幸な側面を鼠によつて具體化した各種の説話が派生してゐた。大きく鼠の嫁入物として一括し得る説話の中で、この派生的な物の代表を認むべき話を、一々の文獻に據つて一瞥しよう。

「かくれざとのゆふらん ねつみのほなみ 花よりだんごなびくねつみ 鼠花見」(一冊、近藤助五郎清春畫、さかい町中嶋屋刊)は珍らしい書物である。其の出版を享保年中(約二百十五年以前)に私は推定するが、かゝる説話は、勿論それ以前から有つたもので、この時に近藤清春の筆でこの様な形になつて現はれ、それが今日まで残つてゐるものと思はれる。

〔梗概〕(すべて人物の頭は鼠で、衣服手足等は人間として畫かれてある)。

(一)龜井戸梅やしきの圖であつて、老木の梅に「しゆつけました」と言ひながら短冊を附ける者、茶屋に腰掛けて花を見る客、女の花見客なきが多く畫かれてゐる。

(2) 龜井戸の大鼓橋の上には藤の長い花房が下つてゐて、藤の花見である。橋を下りる娘が「こはくておりられぬ」言へば、「らんかんにまつゝいてござい」こ他の女が下り方を教へてゐる。茶屋には花見の男女の客が立ちこんで、「おちよぎの遅かつた」こ一人の男が言へば、「久兵衛ぎの早かつた」こ對手の女は答へる。「敷物を借りやれ」こ言ふ男客、「淨瑠璃より徳利のおきが良し」こ言ふ酒好きの男なき、それ／＼に賑かに畫かれてゐる。

(3) 淺草辨天山の梅見で、淺草の山門の上から花を眺めてゐる者もあり、或は辨天山へ懸造りにした茶屋の座敷から眺めてゐる客もある。

(4) 上野の山王の櫻見物の圖である。幕を張つてあちらこちらで花見をしてゐる。女の人達も供を連れて歩いてゐる。
(5) 上野の山から不忍池の辨天へかけての花見の様である。池には蓮の葉が浮び、池の端には茶店が出てゐる、床几がならんでゐる。石段によつて池畔から上野の山へ登るやうになつてゐる。

(6) 花見の歸りの様である。供を連れた女客を中心にして、それ／＼花見からの歸りを畫いてゐる。

これ等の場面は、江戸の花に酔ふ人々の幸福感を鼠によつて強調したものであつて、典型的な鼠の嫁入の一展開としての作品である。即ち嫁入した後の鼠が江戸の花に酔ふ幸福さは、人間のそれより遙かに満ち足りたものゝ當時の人々は信じてゐた爲であらう。そして鼠の嫁入の場合に、嫁入そのものゝ忙しくも幸福である感じを畫かんとして、個人が全然無視されてゐるゝ同様に、「鼠花見」にあつては、花見其のものゝ幸福さを描かんとして、如何なる鼠を中心としての花見か、嫁はどれか婿はどれか、誰が話の中心人物であるか、或は一畫面の中心は誰人であるかを問題としない。其處には鼠の花見によつて強調された幸福感を認めるのみで、其の花見に就いての感じ方も全體的であつて部分的ではなく、感じが漠然として廣く、明確さを缺き、全く兒童の感じ方其のまゝの表現である。

併しながらこの文獻には、花見と言ふ意味からか、成人が多く畫かれてゐて、兒童の姿は割合に尠い。さりながら、(2)に三人、(3)に一人、(5)に二人、(6)に二人の子供が畫いてある。或は實際はこの數よりも多少は多いかも知れないが、素朴な繪と詞から、それと推定し得る者は大體に以上の數である。これ等の子供達は、

「こわくておりられぬ」(龜井戸太鼓橋) (假名遣は原文通り、以下も同様)

「らんかんにまつゝいてござい」(龜井戸太鼓橋)

「かゝ様あれ〜こいがいた」(上野不忍池畔)

「はあ風がない」(凧を上げる子供)

「あにゝ(兄)おちるは」(凧を上げる子供)

の如く、極めて僅に語るに過ぎない。かゝる對話は全體からすれば僅であつて、會話の大部分は大人に興味のある問題であり、大人の鼠のそれ〜の動作姿態に添へて書込まれてゐる。それは此の作品が子供相手の目的のみではなく、それ以上大人を交へた一家の雜誌のやうな意味を持つてゐた事、花見の性質上子供が主なるべきではなく大人を主すべきであつた事、それに大人が説明を加へる事によつて子供にも理解させるが如き意圖が有つた爲であらうと考へられる。

甲「徳兵衛あす竹之丞いかうか」(2)。

乙「おゝ行かうが、竹之丞よりさけの丞がよい」(2)。

丙「淨りより徳利さくくなまがよい」(2)。

甲「酒をいゝつけや」(3)。

乙「まだきつふ寒い」(3)。

甲「何にも肴がない」(3)。

乙「田樂を出しやれ」(3)。

丙「のむなく、こつちはのまぬ」(3)。

甲「おつや様今日はしつぽご語らしやんせ。大勢の聞き手じや」(4)。

乙「扇八藝を語る」(4)。

丙「きつふ節がちがふた」(4)。

甲「七つの鐘が八つなりて、ゑい」(6)。

乙「ほぅ、酔はれたの、たのましい」(6)。

丙「こつちへもあやかりたい」(6)。

の如き對話は全く子供の世界のものではない。さりながら本書中の詞は、一々の相手を意識して語つてゐる場合もあるが、多くは子供等が獨白的に語ると同程度で、それ／＼の畫かれた人物の傍に詞を記入されてあるに過ぎない。元來元祿頃の作品中には、大人が相手を明確に意識して語るやうな場合にも、多少斯うした獨白的の詞も見えるが、この様に甚だしくはない。それは作品が簡粗幼稚な物であるから言ふよりは、子供の心理に合して自然に發達して來た表現の態度が、大人を主とする場合に於ても、依然として持續され、其の特色を失はない結果からであらう。換言すれば、當時の童話記録者は、童話を改作して大人に讀ませる場合に於ても、子供に向つて探つたと同様な表現方法を用ひつけてゐた事によるのである。酒はもよより淨瑠璃も大人の世界の物である。更に、當時の名優市村竹之丞は、元文二年霜月に宇左衛門と改名した事になつてゐる故に、本書の刊行はその以前であるを推定し得るものである。大人のみに限つたものではない

にしても、名優の批評、さては酒に關する話なきは、子供の生活からはかなり離れたものであつた。洵に當時の大人は、今日の人々の想像以上に子供に近い大人であつた。その原因は文化程度の低い時代に於て、教養が少く讀物に乏しかつた爲であつたらう。童心を多分に持つ父母は、斯うした作品を中にして子供等と一緒に打興じたものであつた。私は「鼠花見」を其の内容ミ形式の兩方面から、近藤清春の作品ミしてはかなりに早い時代の物ミ見てゐる、同時に今日の家庭向の雜誌の濫觴を、若し日本にのみ求めたならば、斯うした作品中に萌芽しつゝある事を感じるものである。

「いせ道中」(二冊、長谷川町^田刊、刊年未詳)は東洋文庫内の岩崎男爵藏本中から私が數年前に見附け出した物で、從來は全く書名さへも傳はつてゐない文獻であつた。この書物は惠比壽・大黒・辨天其の他の七福神ミ鼠ミが、伊勢詣をする趣向である。話は鼠ミもが馬に乗つて伊勢參宮に出發し、江戸の日本橋の上を通行する事からはじまり、品川で福祿壽が女鼠に捕へられ、

「ごまらんせ〜」

と勧められ、

「ときへ行て〜。かへりによりませ〜」

と答へるあたり、其れには、

「しな川より川崎へ二里半」

の如き記事が各圖に加へられ、全く江戸時代に行はれた旅行案内の「道中記」に據つて趣向した物であり、これも亦大人の興味を狙つた作品である。「いせ道中」では鼠が七福神のお供をすると言ふ意味は無く、兩者は個々に獨立し、伊勢參宮てふ共同目的に於て一致するに過ぎない。江戸時代の市民は皆旅行好であつた。その様な大人の興味を狙ひ、更に好奇的な

子供等が未だ見ぬ土地に憧憬する心を捕へ、斯うした作品が作られたものであらう。勿論結婚した鼠の嫁が聳き一緒に旅行するなき言ふ意味は全然なく、漠とした鼠によるお目出度氣分に、伊勢参宮の敬虔な氣持を取合せたに過ぎない。

紋上の諸文獻に現れてゐる鼠は、いつも其の中心的の人物を明確にしてゐない。御目出度の氣分が鼠によつて表現されてゐれば、中心的の人物が明瞭にされてゐなくても、説話それ自體が散漫であつたにしても、別に不滿を感じる事が無かつたらしい。さりながら斯うした作品も、或は斯うした物がしつくりする兒童の心理も、讀者である兒童の成長につれ、更に文化の進歩に伴つて、いつまでも舊の状態では満足されさうもない。即ち時代の進展は讀者就成人の讀書力、説話に就いての批判力を高めて來たからである。黒本「鼠の嫁入」(二冊、鳥居清滿畫、刊年未詳)の刊行されるに及び、鼠の嫁入の斯かる點が一大飛躍を遂げた。

黒本「鼠の嫁入」の中心人物は「しろねづみ福五郎」に「初か」の二匹の鼠、即ちこの二人物である。

〔梗概〕大黒天が使つてゐる白鼠福五郎は正直者で、大黒天の御氣に入りである。毎年この福五郎が大黒天の寶物を土用干する程であつた。大黒天の腰元の初かはつを愛し合ふのを辨才天が御覽になり、二人を夫婦にする事にする。白鼠は大黒天から御暇を戴き、大きな邸宅に手當金として十二萬億三千四百五十六萬兩の金、更に當分の間の入用金として數千兩を與へられた。結納の様、初か方の衣服の支度、初かの化粧、道具運び、料理の準備、輿入の行列、結婚式、出産、この様にそれらの場面が描かれてある。結尾には大黒天へ官参りをなし、子鼠に打出の小槌を戴かせ、富貴に榮えた事が描かれてある。

白鼠の福五郎に就いては、

「正直にしてこゝに色白く、美男にして諸々思慮深く、ますおしなきをば見向きもせず、發明にしてすゝみからず、さ

てこそ大黒様の御氣に入りにて……」

「其の性格や容貌を述べ、辨才天が初かのお齒黒を附けるを見て、

「美しい娘じゃ。やがて茶をのみにいきませう」

と言ひ、特に初かは衣裳を美しく、姿態をしほらしく艶麗に畫き、他の女性からは區別し取扱ふ態度が見え、シテ役は初かで、ワキ役が福五郎である。嫁入てふ點から、

「四海波しづかにて猫をなかさぬ御代なれや。相せうのよきこそ目出度かりける」

の様な、謠曲高砂の文句のもぢりがある。従來の鼠の嫁入物の漠然たる態度・詞・繪から蟬脱して、明確な筆致で描く關係上、大人が多く活躍し、子供の姿は稀であつて、僅に鴨の羽根を雀つて料理する男の傍に、少女が一人居て、

「七介ぎのその羽根もくんなさい」

と言つてゐる程度である。斯くてこの作品こそは、寧ろ青年期の女性や家庭内の大人に讀まれ、それに兒童期の子供を加へて讀者としたものらしく、素朴の心は既に大人の心で置き替へられてある。

鼠の嫁入は子供の世界から大人の世界へ移つて來た。私は此處で大人の手に渡りきつた鼠の嫁入の代表的の物を一瞥しよう。

「鼠子婚禮塵劫記」(三冊、曲亭馬琴作、寛政五年刊)は其の最初に擧ぐべき文獻である。

〔梗概〕 八匹の鼠が子の年の元日に大黒殿の廣前で縁結びをはじめ、今年は誰と誰とが結婚して鼠算に子を産む役に當るだらうかきて、皆が籤を抽く、鶉の中將と雪姫とが結ばれた。頼豪阿闍梨が雪姫に戀慕して姫を煙草の引出しへ押込める。東山家の臣の仁木左衛門は謀反を企て、春永の家臣の久秀と一味する。頼豪は偽勅使になつて春永の邸へ來て、岩

見銀山(鼠取りの毒薬入りの飯を食ひ、五體が竦む。色々な事件が起つたが、結局雪姫と中將とは結婚式を大晦日に擧げる。結婚式の御馳走をたべた後で横になつて一眠りする。中將・雪姫・仁木左衛門・久秀なき、みんな牛になつてしまつた。春永と雁丸は牛にもならず、舐ごつこをしてゐる。

これは寛政四年の子年から寛政五年の丑年の正月へかけて、子から丑へ年が移行する事に趣向があり、更に當時の演劇中の人物を鼠の嫁入りに取入れた物である。信長の一代記の世界である所謂信長記と呼ぶ一類の芝居、頼家阿闍梨の傳説、塵劫記、淨瑠璃本「伊達競阿國劇場」(安永八年江戸肥前座上演なきを綱交せてあるが、本質は鼠の婚禮である。本書は勿論大人の興味を狙つてゐるが、時に子供向の分子も見える。例へば春永と久秀と睨めくらをして、春永が、

「あしたの眼ざましには何を食へよう」。

と言つたので久秀が笑ひ、春永が勝つたをなさばそれである。

演劇は當時の大家の生活と深い關係にあつた。大家の一大娯樂である芝居が鼠の嫁入りに取入れられる事は、この説話が世にもはやさればもてはやされる程有り勝な事であり、一方説話そのものが世と共に變遷し、自己を保存する上からも必要であつた。從來の鼠の嫁入りに飽きた子供も大人も、彼等が好む芝居を取入れた鼠の嫁入りの出現にぎれ程喝采したか知れない。「鼠嫁入」(二冊、内新作、樹下石上畫、享和三年刊)は、斯うした傾向の作品中の傑作である。

「梗概」 正月の初の甲子に、大黒天へ氏子の鼠が參詣し、奥座數十疊目に住む鼠の息子は、大福帳と當座帳の間に住む鼠の娘を見染め、家老の白鼠が使者になつて嫁に貰ひたい由を申込んだ。するに先方でも承諾し、二股大根・落雁の鯛なきを添へて結納の目録をこりかはず。婚禮の日取も定まり、嫁の方では下男が筆を審して庭の掃除をしてゐる。枕を駕籠にした物に乗つて花嫁は輿入をし、長持の上で式を擧げる。其の後嫁の鼠は違棚の上で十二匹の子鼠を一度に産み、夫

婦仲もむつまじく、聳この嫁の親類が打揃うそろつて芝居を見に行く。竈かまどの釜かまの前が舞臺で、和藤内が猫を退治する處を演じ、見物の鼠たちは臺所・棚の上・竈かまどの前なきで見物する。親戚の間も睦なごしく末は繁昌はんしょうする。

觀劇の場面が振つてゐるのみか、從來の物に見られない大きな滑稽味が加へられてある。それは嫁の家の下男が庭を掃除する際に、人間が使用する筆を箒はきとして庭をはくので、結局は筆の先に附いてゐる墨で却つて眞黒によごれる事や、この家の人間が昨夜大根おろしを作る「おろし」で芋をおろしたが、其の残りが附著してゐるのを男の鼠が嘗め、鼻の先を「おろし」の齒で負傷した事なきの滑稽である。其の上に畫工の樹下石上の取合せによる繪の滑稽味が利きいてゐる事である。即ち鼠の嫁が乗つて來た駕籠が箱枕に棒を通して作つた物であるが如き類である。其他、

「子供が出来ては、油町のせきおかの寶重丹たげぢんと言ふ藥はたやさず用意して置くがよい。きめうな藥さ。」

の様に、賣藥の廣告までも見える。こゝに至つては、如何に鼠の嫁入が時の人々の間に溶け込んでゐる。世に共に變化してゐるかゞ知られる。

要するに鼠の嫁入の展開の一面は、それを大人向に高める一途にあつた。「鼠嫁入」(柱題、櫻川慈悲成作、享和四年刊、半紙本一冊)なき、芝居物であると同時に、高められた鼠の嫁入物であり、全然大人のみを讀者として書かれたものである。本書の扉には

「大黒の日待ひまち見へて毛色までしろしろ鼠の茶番狂言

櫻川慈悲成

の狂歌が記され、享和四年甲子年の子年ねを祝つての刊行である。全篇が「天井裏の段てんじやうりのだん」・「御伽が淵おとぎがふちの段道行だんどうぎやう妹背いもせの赤本あかほん」・「御伽が淵 第二」の三段より成り、挿繪は眼の醒める様な錦繪摺の豪華なものである。櫻川慈悲成は有名な芝居好・茶番好であり、又、凝こり性であり、慈悲成にしてこの書のある事は誠に似合はしい。白雪公の姫君はつかけ廿日にじふにち姫ひめ三甲子屋さかひねの一子忠次郎

の戀愛を、白雪姫に横戀慕する岩見銀左衛門の關係、姫と忠次郎とを庇ふ白鼠老翁と目黒の白藏主なきが活躍し、その文章は全く淨瑠璃本の詞章其の儘である。

「詞コレ赤本は鼠の嫁入、エ、うら山しいなせに我身は此様に、天井はれての女夫にはなれぬ事ぞ、同じ鼠に生れながら、いさしかはいの我思ひ、男の其そばに居るこそさへも、ならぬまは何の因果の身の上やも、くさき立くわが身をかつばさ赤本を、喰さきくなく聲は、こだまにひやく九ツの枕時計の音淋し……」。

挿繪の人物は、首から上は鼠であつて、それ以下は全く人間である。演劇の身振を彷彿せしめるものが多く、芝居好の讀者を雀躍せしめた處であらう。最後の大黒天が袋に寶物を入れ、鼠が千兩箱をかついで行く正月の様なき、初春の縁起を祝つた御祝儀物、大人の讀物としての特徴である。

鼠の嫁入の展開の他の一方面は傳統の墨守であつた。これは從來通りに幼い子供の間に行はれた。子供を對象として書かれた鼠の嫁入の多くは、單なる口碑説話の記録に過ぎない物が多い。それ等の多くは常に子供に弄ばれた關係上、多くは滅亡し、現に残存する物は誠に稀である。

鼠を他の動物に置きかへた説話もある。例へば「狐の嫁入」の如きは全く鼠の嫁入と同様の形で現されてゐる。「狐の嫁入」(二冊、色摺、享和頃の刊行、半紙本)は其の代表的の物である。

〔梗概〕 大和屋源九郎が初午詣の折に、玉屋の娘おきつを見染め、仲人をもつて言ひ入れたので、早速稻荷の境内で見合をなし、雙方で良い言ふ事になり、結納・結婚式・出産を経て、宮参りもなつてゐる。

單に狐のみでなく、他の動物にも同様に置替へられてゐる。

鼠の嫁入は幾變遷を経て今日に至つた。そして辿り附いた處は「小學國語讀本 卷二」所載の「ネズミ」ノ「ヨメイリ」で

あらう。この説話は古代印度寓話に據り、古來からの日本の鼠の嫁入に據らなかつたらしく思はれる。さりながら紋上の變遷の経路を考へる時、あたかも鼠の嫁入はこの一課を産み出す爲めに、長年月の展開をしつゞけて來た如くにも考へられる。それは恐らくは偶然の事であらう。併しながら、斯うした説話の根柢には國民性の重大な基礎があり、この基礎に適合した爲に「ネズミ ノヨメイリ」の一課も國定教科書中に採入れられたであらう。更に鼠の嫁入それ自身の展開に於て、其の力點を結婚式でふ重大事から前に移す傾向をもつて日本の鼠の嫁入が動いて來た事が、はしなくも印度寓話の興味ある部分に契合する處が有つたからであらう。

(完)

正誤

五月號(第三十七卷、第五號)中の左の點を訂正致します。


十一頁「かくれざとのゆふらん 鼠の嫁入」の「かくれざとのゆふらん」を削る。

十一頁「赤本」の次の「鼠花見」を次の様に訂正する。

かくれざとのゆふらん 鼠花見(一冊、近藤助五郎清春畫、さかい町中嶋屋刊)。
花よりだんごをひくねつみ

十一頁「ねずみ文七」「鼠よめ入」の間へ次の様に入れる

花見鼠(一冊、中島屋刊)。

十二頁「いせ道中(一冊、長谷川町、刊、刊年未詳)の下へ「新發見」と入れる。

十二頁「鼠嫁入」(櫻川慈悲成作、寛政頃刊か)の「寛政頃刊か」を「享和四年刊」と訂正する。